

社会人基礎力を伸ばし 就業力につなげる

——地方私立大の戦略

経済産業省が掲げる「社会人基礎力」は「学士力」と大きく重なっている。学士力の向上を通して、社会人基礎力を伸ばすことができる。こうした考えから、普段の学習のなかで社会人基礎力を養い、就業力につなげる地方私立大がある。徹底した地域密着でインターンシップを充実させるなど、その独自の取り組みを紹介する。

外付けにしないキャリア教育

学生をどう育て、どう社会に送り出すのか。特に地方私立大学にとって、大学の出口の問題は最重要課題と言っている。

今やほとんどの大学がキャリア教育を行うが、その実態は、旧来型のカリキュラムを維持したまま、キャリアセンターが主導して就職支援のセミナーや講演会を行うというものがほとんど。キャリア教育はあくまでも「外付け」で行われている。

そんななか、「学士力こそ就業力」ととらえ、カリキュラムのなかにキャリア教育を組み込んでいる大学がある。2012年度、札幌大谷大学に新設された社会学部地域社会学科だ。地域社会で長く活躍する人材の基盤づくりを標榜し、「地域密着」を徹底する学部である。

同学部では、キャリア教育を「外付け」にしない。普段の学習のなかで社会人基礎力を養成している。

初代学部長（2012年4月～16年3月）を務めた平岡祥孝教授は次のように説明する。

「社会人基礎力と学士力は大

きく重なっています。学士力の向上を通して社会人基礎力を伸ばすことができるのです」

経済産業省が掲げる「社会人基礎力」（A・T・T）は、前に踏み出す力（Action）、考え抜く力（Thinking）、チームで働く力（Teamwork）の3つである。図表に示す通り、この社会人基礎力と学士力は重なるところが多い。

この社会人基礎力をさらに掘り下げていくと、ビジネスパーソンとして求められる汎用性になる。平岡教授は説明する。

「高校のキャリア教育の職業探しでは、医者や看護師、パティシエなど専門職ばかりを考えがちですが、実際には多くの生徒が将来的には企業・団体に勤めます。それらの職場では、専門職種で切り分けられておらず、営業、経理、総務などに配属される可能性がります。つまり、さまざまなに対応できる汎用性が求められます。そう考えると、汎用性人材としての基盤を整えておくというのが、地域密着型



札幌大谷大学 社会学部 初代学部長 平岡祥孝 教授

の大学の役割だと考えられます。普段の学びを通して、そうした力を身につける必要があるということです」

アクティブラーニングを充実

同社会学部では、4年間を通して少人数ゼミナールと担任制度によって、面倒見の良い教育を展開する。カリキュラムは教養教育とキャリア教育を融合し、日本語力の養成とアクティブラーニングを重視する。

日本語力は、社会人基礎力のベースになることから、1年次から徹底して文章表現を身につける。アクティブラーニングは、授業のなかにディスカッションやディベートを取り入れるほか、「ボランティア」や「フィールドワーク」の科目で実践的な活動をする。そのなかでも目を

ひくのが、「インターンシップ」の科目だ。

同学部では、一般教養科目のなかに「インターンシップⅠ」「Ⅲ」を設置し、卒業要件単位として2年次の前期「インターンシップⅠ」で仕事や組織の仕組みについて学び、後期の「インターンシップⅡ」で社会が必要となる常識やマナーについて学ぶ。そして「インターンシップⅢ」で、3年次夏休みの5日間を利用して、受け入れ先企業で職場体験を行う。

学部長自ら企業開拓を行い、地元企業を中心に多くの受け入れ先を確保した。希望者は全員必ず参加できる。「受け入れ先はできるだけ学生の希望に沿い、納得して行ってもらっている」と平岡教授は話す。

2015年度は、3年生44人のうち希望した38人全員が職場体験を経験した。

5日間のプログラム内容は、学部と企業が共同で組み立て、座学よりも、主体的に体験できるアクティブラーニングの時間

を多くしている。

実施期間中にはゼミナール担任教員が職場を訪問し、実習の様子を確認する。こうした手厚いサポートは「少人数で地域密着だからこそできる」と平岡教授は胸を張る。

実施後のフォローもきめ細かい。会社からの評価表をもとにキャリア教育担当の教員が個人面談を行い、社会人としてのマナー・常識・意欲・姿勢など、浮き彫りとなった課題を振り返る。

また、学部全体でインターンシップ実習報告会を開き、発表を通して学びの定着につなげた。他の学生がどのような体験をしたのか情報共有する。

インターンシップでは、実際に働いている若手社員と交流する機会もあり、現場のリアルな状況を知ることができる。また、他大学の学生とグループワークやディスカッションを行い、大学で学んだ企画・発表のスキルを生かす場面もある。初対面の学生たちとディスカッションし、「相手に理解してもらうに

は根拠が必要」などと課題に気づく学生もいる。

インターンシップは、企業をさまざまな視点から観察し、より自分に合った進路を選択するための指針になる。採用とは無関係に行われているが、職場体験が志望動機となり、採用に結びつけた学生もいるという（2016年卒業生のうち2名）。

泳げる体力は大学で

同学部の一期生は、2016年3月に卒業。入学者44人のうち42人が卒業した（1名病气退学、1名留学）。進学・留学等を除く就職希望者38人全員が地元有名企業を中心に正社員採用で2月中に内定した。

「4年間の学生生活できちんと学びを積み重ねていけば、就職活動は何も恐れる必要はない。大学では働く基盤を作り、あとは職場で具体的な仕事を覚えていけばいい。泳ぎ方は企業で、泳げるだけの体力は大学でつける」ということです」と平岡教授は言い切る。

（取材・文／沢辺有司）

図表 社会人基礎力と学士力

社会人基礎力（経済産業省）

I 前に踏み出す力 (アクション)	①主体性 ②働きかけ方 ③実行力
II 考え抜く力 (シンキング)	①課題発見力 ②計画力 ③創造力
III チームで働く力 (チームワーク)	①発信力 ②傾聴力 ③柔軟性 ④状況把握力 ⑤規律性 ⑥ストレスコントロール

学士力（文部科学省）

I 知識・理解	①多文化・異文化に関する知識の理解 ②人類文化、社会と自然に関する知識の理解
II 汎用的技術	①コミュニケーションスキル ②数量的スキル ③情報リテラシー ④論理的思考力 ⑤問題解決力
III 態度・志向性	①自己管理能力 ②チームワーク、リーダーシップ ③倫理観 ④市民としての社会的責任 ⑤生涯学習力
IV 総合的な学習経験と創造的思考力	